ヒマラヤ学誌　No.14, 140-155, 2013

「森のチベット」アルナーチャル・プラデーシュ州西部における自然信仰の聖地の今とその特色

小林尚礼

小林写真事務所

1　はじめに―なぜ「自然信仰の聖地」なのか

ヒマラヤ・チベット地域には、聖地と呼ばれる場所が数多く存在する。それらは大きく２つの種類に分類される。1つは、ポタラ宮やジョカン寺（ラサ）などのチベット仏教の建造物を中心としたもので、寺院そのものや仏像または転生する高僧など人間に直接関係するものが祈りの対象となる。

もう１つは、聖山や聖湖など自然そのものを畏敬して祈りの対象とするものだ。聖地となった後にそこで活躍した聖人の物語が生まれたり、仏教寺院が建立されたりするが、根本は、人間を超える力を持ちときに生命を奪う圧倒的な自然を畏怖する感覚に基づいている。そのような自然信仰の聖地は怖ろしいだけでなく、水や食物などを生みだす場所（例えば水源の山）であることも多く、生命の源のような存在だと考えられる。また、何千万年も前に生成された岩石や化石などをご神体とする聖地は、地球の歴史そのものに祈るようでもある。そのような自然に対峙するとき、人間というものが生かされる存在であることに改めて気づき、命の根源を考えさせられることがある。それは、信仰心がない人にとってもわかりやすい感覚だ。

ヒマラヤ・チベット地域の高所には、自然のスケールの大きさや地形の険しさなどの理由から、そのような畏怖の対象となる自然が多い。聖地に祈って自分の存在を客観視することが、人生の安心感や幸福感にもつながると考えられる。またそのことが、厳しい環境の高地に人が住む理由の１つであると筆者は考えている。以上のような理由から、本稿では自然信仰の聖地（以下では単に聖地ということもある）に的を絞って報告・考察を行う。

アルナーチャル・プラデーシュ州西部は、降水量が多くチベット高原に比べて気温が高い。森林に覆われた山中にモンパやブロッパなどのチベット仏教を信仰する人々が暮らすことから、「森のチベット」と呼ぶことのできる場所である。自然が多様なため、自然信仰の聖地も数多い。この地域の聖地を概観して、特にナムシュ村の聖地で行われる祭礼の今に注目し、他の地域の聖地と比較しながら森のチベットの聖地の特色を考えたい。

2　アルナーチャル・プラデーシュ州西部における自然信仰の聖地

2010年３月に、アルナーチャル・プラデーシュ州西部のディランを中心とするウェスト・カメン地区と、タワンを中心とするタワン地区の聖地を広く訪ねた。これらの地区が外国人に開放されてから日が浅いため、現地の人以外には知られていない聖地も多い。７つの聖地を紹介する。

ナムシュ村の聖山と聖木（祭礼ラーソイシー）（写真１）

ディラン近郊のナムシュ村に聖山と聖木がある。そこで行われる祭礼をラーソイシー（神への祈り）と呼ぶ。村人たちが聖木の周りに集まって、村をとり囲む14の山の神々へ食事などを捧げ、豊作や繁栄を祈る。毎年簡素な祭事が行われているが、３年に１度、チベット暦11月17日からの３日間は、村をあげて盛大な祭りが開かれる。2010年12月に３年に１度の祭礼があった。次項で詳細に報告する。

テンバン村のサンジェリンと、ラガン村のラガン（写真２）

サンジェリンは、テンバン村近くの山中にある岩壁を祭った聖地である。岩には多くの割れ目や凹部があり、それぞれに宗教的な意味や物語が与えられている。壁の一角から、四臂のチャンリザ

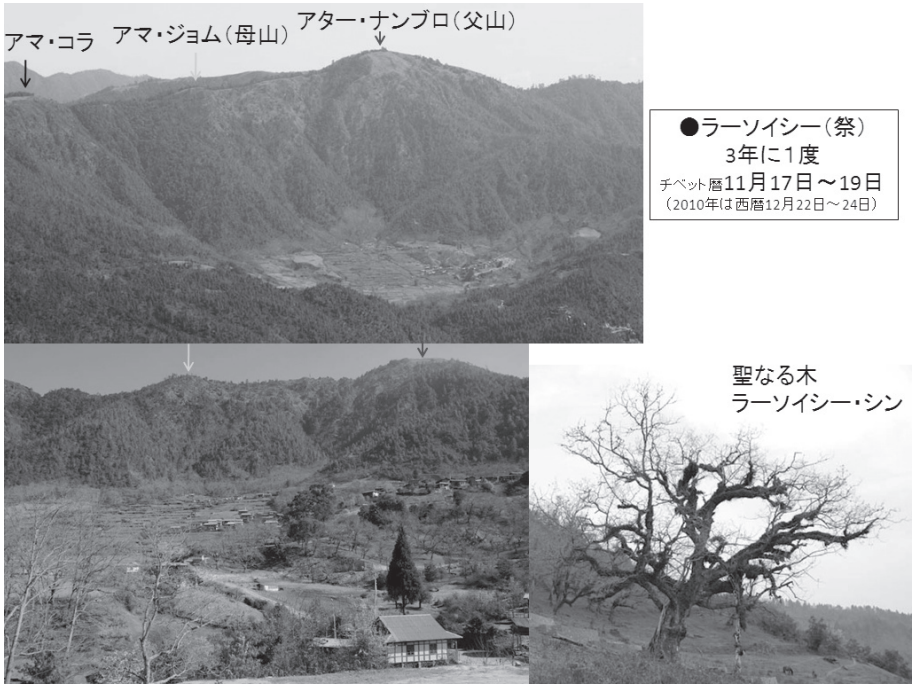

写真１　ナムシュ村の聖山と聖木

写真２　テンバン村のサンジェリンと、ラガン村のラガン、チャンリザの石

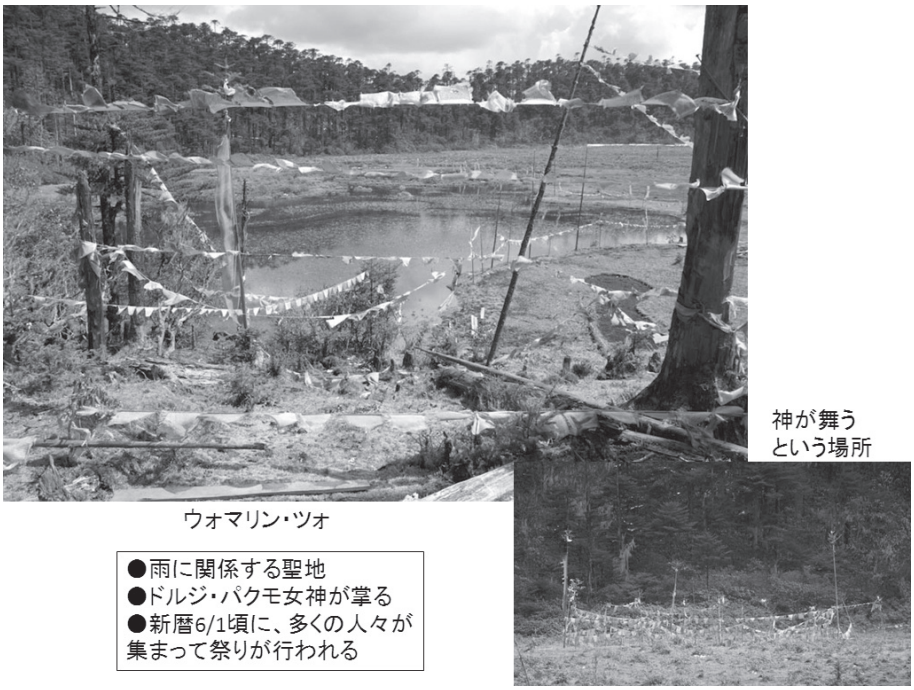

写真３　ナガジジ付近のウォマリン・ツォ

写真４　ジミタン村とゴルサム・チョルテン、悪魔の家

（チェンレジ、観音菩薩）の形が浮きでた小石が見つかり、そこにお堂が建てられた。

ラガン村は、テンバン村やナムシュ村からさらに山の奥へ入ったところにある戸数8～9の集落。周囲はコケが絡みつく原生林に覆われている。樹林を切り開いた草地にお堂が建ち、内部にサンジェリンで見つかったチャンリザの石が祭られている。この石はひとりでにラガンまで来たと伝えられる。お堂のあたりから前方の谷が一望できて眺めがよい。お堂の周りには、広葉樹の大木（神木）や、チャンリザが普段棲むという洞窟などがある。テンバン村、ラガン村ともディラン近郊に位置する。

ナガジジ付近のウォマリン・ツォ（写真3）

ディラン・ゾンの南側の山中にある湖と湿地帯。ナガジジ放牧地へ続く車道をたどり、車を降りて40分ほど樹林帯を歩いて達する。標高は約3,450 m。湿地帯に入ったり大声を出したりすると、雨が降るといわれる。ドルジ・パクモ（金剛牝豚）女神がつかさどる雨や水に関係する聖地だ。ウォマリンの「ウォマ」はミルクを意味する。毎年西暦6月1日頃に祭事が催されて、仏教の僧とともに周辺の村人が多く集まる。

ジミタン村とゴルサム・チョルテン（写真4）

タワンの北西約40 kmのところにジミタンという村があり、その入り口にゴルサム・チョルテンが建つ。谷の両岸は急傾斜で高くそびえ、圧迫感のある土地には不釣り合いなほど立派な仏塔だ。ジミタンの現地語（モンパ語）の発音は「ジマタン」で、砂の場所という意味である。川の岸に砂地が多い。

この地でかつて不作や奇病が続いたとき、それを鎮める目的でネパール式のチョルテンが造られた。国境を隔てたブータン東部のタシヤンツェにも、同じような地形の場所によく似たチョルテンが建つ。ジミタン村には毒殺の言い伝えがあり、悪魔の家と呼ばれる建物がたつ。その家に住んだかつての王の妻が、実は悪魔だったという伝説に基づく。

マンダラプドゥン村の洞窟プドゥン・コラ（写真5）

ディランの南のマンダラプドゥン村にある洞窟。村の前の川を越えたところに、レッサ・ゴンパというお堂がある。ザンバラという神とドルジ・パクモ女神の壁画が描かれている。山を登ってゆくと高さ10 mほどの滝があり、そこで足と手と顔を清める。そこから先に入るには、靴を脱ぎ裸足にならなければならない。さらに山道を10分ほど登ると、小さな洞窟が2つある。1つ目の鍾乳洞はザンバラと呼ばれ、天井一面から鍾乳石のつららが下がる小さな鍾乳洞である。2つ目はドゥカンと呼ばれる浅い洞窟で、大きな岩がえぐれたような形をしている。鍾乳石と石筍は穴が開いたり張り出したりとさまざまな形をしており、それぞれ宗教的な意味や物語が与えられている。

ジャン村のキムナス・ゴンパ（写真6）

ディラン地区とタワン地区を分けるセラ峠からタワン側へ降りてゆく途中の、樹林に覆われた急

写真5　マンダラプドゥン村の洞窟プドゥン・コラ（ドゥカン）

写真6　ジャン村上部のキムナス・ゴンパと周辺の森

斜面に2つの寺院がある。1つがキムナス･ゴンパ、もう1つはスィリン・ゴンパといい、両寺ともゲルク派に属する。ジャン村の近くである。

キムナスとは犬（キム）の聖地（ナス）の意味であり、カルマパが犬のあとをつけてこの地へたどり着き聖地を見つけたとの伝承から名づけられた。聖地発見後、ソナム・ゲツェンという僧が寺院を建立した。寺の守護神はバルプン・ドゥンという。寺院から歩いて2日かかるところにドゥカンと呼ばれる洞窟があり、その一帯が聖地とされる。霧のかかる原生林に囲まれたキムナス・ゴンパは、まさに幽玄という雰囲気である。寺院の周囲には椅子の形をした岩や化石が埋めこまれた岩などがあり、高僧らに関係する言い伝えがある。近年1世紀ぶりに新種として発見・登録されたアルナーチャル･マカクに、寺院の近くで出遭った。野生動物が人知れず生きてゆける土地である。

タワンのタクツァン・ゴンパ（写真7）

タワンの町から北西の山脈へ向けて車で3～4時間走った山中に、タクツァン・ゴンパがある。標高約3600 m、タクツァンとはトラのねぐらの意味。2007年に改築された3層のニンマ派の寺院が建つ。寺の守護神はツェパメ（長寿の意）という。ジグチェという神の木像が大切にされている。ジグチェ像を始めとした古い仏像は、1735年頃に造られたとされる。

寺院の下部の原生林に覆われた急斜面に奇妙な形をした岩が数多く点在し、その一帯が聖地とされる。すべての岩に祈祷の旗ルンタが祭られて、厳かな聖地の雰囲気がただよう。寺の上部斜面にも、上方に向かって一直線にルンタが祭られている。

以上の7つの聖地を実見することができたが、そのほかにもセラ峠近くのパンガ･チャン（バガ･チャン）と呼ばれる多数の湖沼が点在する聖地や、ルムラ村近くのボン教の聖山ツォンツォン・ラとツィプチェ・ラなどがあるという。

3　山への祈り―ナムシュ村の祭礼「ラーソイシー」

ナムシュの標高は約2300 m、山の斜面に開かれた人口約330人のモンパの村だ。そこで「ラーソイシー（ラーは神、ソイシーは祈り）という名の祭礼が、3年に1度開かれる。村の背後にある山アター･ナンブロ（父山ナンブロ）とアマ･ジョム（母山ジョム）の神を始めとする山の神々に村へ降りてきてもらい、奉げ物を贈るという祭りだ。神が村の家々を訪ねることで、幸福や繁栄、豊作、雨乞い、悪霊退散、健康などがもたらされるという。

ラーソイシーは仏教がこの地へ入る前から存在する祭りで、ボン教に属するようだ。山に祈る人を意味する「プラーミー」と呼ばれる神官が、祭りをつかさどる。ナムシュ村にはアター・ナンブロの一族とアマ・ジョムの一族がいて、それぞれに神官「プラーミー」とアシスタントの「ツァンミー」が1人ずついる（写真8）。

写真7　タワンのタクツァン・ゴンパの下部に点在する聖なる石の1つ

写真8　左からアター・ナンブロのプラーミー（パサン・ツァルモ氏）とツァンミー、アマ･ジョムのプラーミーとツァンミー

祭礼のプログラムとその意味

ラーソイシーは、チベット暦 11 月 17 日から 3 日間行われる。2010 年のラーソイシーに参加して得た知見を、順をおって述べる。なお、2010 年はチベット暦 11 月 10 日が 2 回あったため（閏日）、チベット暦 11 月 16 日（西暦 12 月 22 日）からラーソイシーが始まった。

（準備）

祭りで使う次のようなものを、前日までに製作、購入する。

・シェー：食べ物にひもを通して、大きなペンダント状にしたもの。神に奉げる。使う食材は、揚げパン（カプゼ、ひも状のものと円盤状のもの）、果物（ミカン、リンゴ、バナナ、パイナップル、ココナツなど）、魚（写真 9）、サトウキ

写真 9　山の神へ捧げる食材。手前から時計回りに、地元産の川魚（ンガ）、ミカンなど柑橘類、揚げパン（カプゼ）。ひもに通して大きなペンダント状の「シェー」をつくる

写真 10　麦粉で動物をかたどった人形や小物の「ツォク」。串に刺して神へ捧げる

写真 11　ヤクの腸にトウモロコシの粉や香辛料などをつめてゆでた「ジュマ」

写真 12　1 日目の儀式で使うほうき状のものをつくるナンブロ・プラーミーのパサン・ツァルモ氏

写真 13　馬の頭に似せた「ゲン」。村へ降りてきた神々が乗る

ビなど

- ツォク：麦粉で動物をかたどった小人形や小物（写真 10）。1 日目にくしにさして神に奉げる。
- 食糧：ジュマ（ヤクの腸にトウモロコシの粉や香辛料などをつめてゆでたもの）（写真 11）、プタン（ソバでつくった麺）など。神に奉げる。
- 1 日目の儀式で使うほうき状のもの（写真 12）
- ゲン（馬の頭（の飾り）に似せたもの）（写真 13）：山の神々が村内を移動するとき乗る。
- ティンガン（槍）：山の神々が村内を移動するとき護衛する。

1 日目前日の夜に、ナンブロ・プラーミーが儀式を行い、14 いる山の神々を村へ降臨させる。それらの神はすべてナムシュ村を囲む山の神であり、アター・ナンブロ、アマ・ジョム、アマ・コラ、アタ・コティ、プーショルプなどの裏山の小さな頂の神々が含まれる。また 14 の神のうち、ラブラン（神の家）と呼ばれる家の神ロ・ゴスン・ダクパは霊力が強く、悪事をすると恐ろしい祟りがある。ラーソイシーでは、ラブラン家の神がホストで、ほかの 13 の神はゲストとされる。

このほかに川の神や火の神など 100 以上の自然神がいて、山の神々と行動をともにすることがあるという。

（1 日目）

まだ暗い 4 時過ぎ、プラーミーとツァンミー、3 人の村人、大小の羊 2 頭が連れだって、村の家々を回り始める。小さい羊はジョム・ラワ（写真 14）と呼ばれ、アマ・ジョムが乗るとされる。クレカンと呼ばれる古い家 18 軒を訪ねて、神々を迎えるために部屋や奉げ物を清める。

写真 14 アマ・ジョムが乗るとされる羊ジョム・ラワ。カタを巻きつけられて、額にバターをつけられている。1 日目

写真 15 プラーミーらを迎える家では、お清めを受ける神への捧げものが並べられる。1 日目

写真 16「ラブラン」と呼ばれる神が宿る家に、プラーミーらや村の幹部が集まる。1 日目

各クレカンの家では、山のような奉げ物の食糧が大部屋に並べられる（写真 15）。ナンブロ・プラーミーが祈りの言葉を唱えて、聖水を奉げ物にかけて不浄をとり去る。1 軒の儀式は 10 分程度で終わり、次々とクレカンの家を回ってゆく。最後はラブランと呼ばれる家で同様のことを行い、清めの儀式を終える。

10 時過ぎ、ラブラン家にプラーミーを始めとする関係者全員が集まり、祈りを奉げる（写真 16）。家を出て、全員が一列に並び、神木ラーソイシー・シンをめざして行進を始める。奉げ物を担いだ村人たちが合流し、長い行列となる（写真 17）。

写真 17 神への捧げものを担いだ村人たちが、ラーソイシーの会場となるコナラの神木をめざす。1 日目

写真 19 水を張った皿に、太陽・月・星の形をしたバターを浮かべる。バターが自分の方に来たら、神に見守られていて運がよい。1 日目

写真 18 神木ラーソイシー・シンの周りに飾られた、神へ捧げる食べ物「シェー」。1 日目

写真 20 山へ祈るナンブロ・プラーミー（左）とナンブロ・ツァンミー（手前右）。1 日目

コナラの神木の周りに村人 200 人近くが集まり、クラン毎に座る。奉げ物のシェイを飾り（写真 18）、占いのポット（写真 19）などを設置してゆく。プラーミーたちはもう 1 つの神木の近くに座り、祈りの儀式を始める（写真 20）。やがて村人たちは家族ごとに食事をしながら、酒や飲料を飲み始める（写真 21）。これは、村へ降りてきた神々と食事をしてともに楽しむ時間である。皆この日のために大金を使って奉げ物やご馳走の準備をし、村外に住む人々も村へ帰省した。多くの人々が満ちたりた表情をしていた（写真 22）。

食事が一段落すると、神々を山へ帰す儀式が始まる（写真 23）。神をゲンの馬に乗せて、ティンガン（槍）で護衛しながら送る。14 の神々すべてを山へ帰して、1 日目の行事は終了する。

（2 日目）ゲン・ジョンシー（ゲンのダンス）

朝、14 の神々を再び村へ降臨させる。

9 人の少年がゲンをかつぎティンガン（槍）を持って、「アーヘー！」と勇ましく叫びながら鈴を鳴らして村を練り歩く（写真 24）。18 のクレカンの家に、神々をつれてゆくのだ。家の主は少年たちと神々を丁重に迎えて、健康や豊作などを願う。願いを聞いてもらうお礼として、魚やトウガラシ、切干大根、貴重なヤク・チュラ（カビの生えたヤクチーズ）、リビ・チュラ（乾燥納豆）などをお返しする（写真 25，26）。

家を訪問するとき、少年たちは家の中で思いきり足を踏みならす（写真 27）。このとき床が壊れたら、家の維持管理が悪い主の方が罰金を払わなければならない。神々の訪問が、家の強度診断を兼ねている。

写真 21　神木の周りで、神との会食を楽しむ村人たち。1 日目

写真 22 神木の周りで、神との会食を楽しむ村人たち。この日のために、村外に出ている人たちも帰省する。1 日目

写真 23 神々を山へ帰す儀式。ゲン（馬）と槍を持った村人が、奇声を発し悪霊と戦う仕草をして観客を楽しませる。1 日目

18 のクレカンを回り終わると、集めた食材を用いて「カズィ」と呼ばれる特別な前菜をつくる（写真 28）。神が好む食べ物だという。この日も 14 の神々を送る儀式を行い（写真 29）、最後にみなでカズィを食べる。

（3 日目）　ゲン・ノンシー（ゲンの見送り）

朝、祭りのホスト役のラブランの神（ロ・ゴスン・ダクパ）だけが、村へ戻ってくる。

昼過ぎにプラーミーらがラブラン家近くの広場に集まり、ラブランの神を送る儀式を行う（写真 30）。最後は再び皆でカズィを食べて終了する（写

写真 24　9 人の少年がゲン（馬）を背にかつぎ槍を持って、神々を連れながら村の家を訪ねる。2 日目

写真 27　神々をつれて家を訪問するとき、少年たちは足を踏みならしてときに床を壊す。2 日目

写真 25　家を訪ねてくれた神々へ、地元産の魚やトウガラシ、切干大根を捧げる。神が好む辛い前菜「カズィ」の材料になる。2 日目

写真 28　神に捧げる特別な食べ物「カズィ」。カビチーズや乾燥納豆、少し発酵した魚を混ぜた辛い味つけを、神が好むという。

写真 26　カビの生えたヤク・チュラ（ヤクチーズ、右の白い塊）とリビ・チュラ（乾燥納豆、左の黒い塊）。どちらも強烈な臭いのするモンパ特有の嗜好品だ

写真 29　14 の神々を山へ送る儀式。2 日目

写真 30 ラブラン家の神を山へ帰す儀式。色鮮やかなゲン（馬）に神を乗せて、槍やナイフで悪霊から護衛しながら送り届ける。3 日目

写真 31 たき火を囲んで「カズィ」を食べる子どもたち。何種もの発酵食品とトウガラシが織りなす不思議な味わいは、一度食べるとやめられない。3 日目

写真 32 村の背後の山から水が生まれる。この恵みに対して人々は祈るのだ

真 31）。

祭りのために帰省した人々が、村外へ戻ってゆく。

（考察）

その他に村人から聞いた話を記す。

- すべてのものは、（山の）神から与えられる。
- モンパのすべての村には、神の山がある。
- モンパの大切な神は山。より高いところに暮らすブロッパは、チベットから移住してきたので、仏教の仏が大切なのではないか。
- ラーソイシーは魚の祭りともいえる。山の神々は魚が好きだという。
- 神々は、豚肉、鶏肉、山羊肉、卵などは好まず、魚、ヤク、羊の肉を好む。プラーミーも同様にしなければならない。
- アマ・ジョム（ジョモ）の山は、ブータンのメラック村にもある。
- アマ・ジョムはブータンのメラック・サクテンから来て、アター・ナンブロと結婚した。
- アマ・ジョムは全世界の神だが、ナンブロはナムシュだけの神である。
- ナムシュ村は、かつてブータンとの戦いに負けて全滅したことがある。誰もいなくなったナムシュ村へ最初にやってきたのが、アッサム出身のナンブロの一族だと言われる。彼らはすべての土地の所有権を持ち、他の村人へ土地を貸している。
- ラブランの一族が 2 番目にテンバンから、アマ・ジョムの一族は 3 番目にチベットからやって来た。遅く来たアマ・ジョムの一族が他を支配した。
- ラーソイシーの簡素な儀式は毎年行うが、3 年に 1 度だけ大規模な祭りを開く。理由の 1 つは、準備に金・物・手間がかかるためだという。
- テンバン村では 6 年に 1 度、ディラン・ゾンでは 1 年に 2 度ラーソイシーが開かれる。

村人たちの話から、次のようなことが考察できる。

モンパが山の神を大切にしているということは、彼らが山とともに生き、山によって生かされていることを実感してきた歴史を物語るのではないか。アター・ナンブロは標高 3000 m にも満た

写真 33　ブータン東部タシガンの聖湖ダンリン・ツォ。チベットから来た神ダンリンによって造られたという

写真 34　インド北部ラダークの聖地ゴンパ・ランジョン。見事な球状花崗岩が祭られる

ない山だが、その山がモンスーンを受けとめて多くの降水をもたらし、山頂からわずか500 m下のナムシュ村に途切れることのない水をもたらしている（写真32）。豊富な降雨によって森が育ち、森に生えるコナラの大量の枯葉が肥料となり、畑の作物をはぐくんでいる。ナムシュ村の暮らしは、まさにアター・ナンブロとアマ・ジョムの山に支えられているといえるだろう。

ラーソイシー祭にとって魚が重要だという事実も興味深い。蛋白源として、目の前の川から採れる魚は貴重だったと思われる。山の恵みが魚を育てるという自然の摂理を、昔から知っていたのだろう。

そして、アター・ナンブロとアマ・ジョムが、それぞれアッサムとチベットの出身であることも、興味深い事実である。ラーソイシーという祭りは、アッサム文化とチベット文化が融合して生まれたナムシュ村民の成り立ちそのものを物語っているように思える。

村人の思い

ラーソイシーを指揮するナンブロ・プラーミーのパサン・ツァルモ氏（36歳）は、18歳で祖父からプラーミーの仕事を継いだ。世襲だが、先代とその兄弟の息子のなかで、くじなどによって決めるという。継いだときは、「難しい仕事だから、なりたくなかった」と思ったそうだ。豚肉や鶏肉、卵などは一生食べてはいけないし、結婚は許されるがラーソイシーの1週間前から女性との関係を絶たなければならない。

だが7回のプラーミーの大役を終えて、ラーソイシーの責任者であることを誇りに思うようになってきたという。3日間の全プログラムを終えた直後には、「いろいろなことが（以前より）うまくできて、ハッピーだよ」との感慨を語ってくれた。パサン氏から、運命を受け入れた人間の風格のようなものが感じられた。

近年観光客に開放されて、生活や経済が大きく変化し始めたアルナーチャル・プラデーシュ州において、伝統的な祭りに対する人々の意識はどのようなものだろうか。26歳から98歳までの5人の村人に聞いてみた。

まず、ラーソイシーが好きかという質問に対しては、2人が「好き」と答え、年配の2人は「好きというよりも、参加しなければならないもの」と答えた。

参加しているときの気持ちは、「幸せ、楽しい」が3人で、その理由は「家族みんなが集まって、ピクニックのよう」だからとか、「代々受け継いできたものに参加できる」からと答えていた。

どのくらい重要かと聞くと、全員「とても重要」との答えで、理由はラーソイシーを行うことが健康や収穫に直接関係するからとのことだった。56歳男性と70歳男性はこれまでのラーソイシーにすべて参加しているとのことだった。

近年の変化についても尋ねた。ほとんどの人が服装や食べ物の変化を認めているが、同時に「精神的な部分は変わっていない」と自信を持って答えた。また、近年は車や携帯電話などが使えてて便利になり、参加者が昔より増えたという人がいた。一方で、「食べ物のお供えが少なくなってきた」ことを心配する意見や、「規範が守られなくなり、本来あったものがなくなってきている。ラーソイシーの祭礼はもう終わらせて、仏教の祭りに変えた方が良いのではないか」という厳しい意見もあった。

総じて見ると、聖地巡礼などの伝統文化の継続に対して、楽観的な意見が多いように感じられた。ヒマラヤの他の場所の祭礼で質問したときも、同じ傾向があった。見た目の服装や生活スタイルの変化ほど、住民の心は変わっていないようだ。ヒマラヤの圧倒的に大きな自然がそうさせるのか、世代が変わってもそうあり続けるのか、これからも見つめてゆきたい。

4　ブータンとラダークの聖地との比較

アルナーチャル・プラデーシュ州の西隣りのブータンと、遠く離れたヒマラヤの西の果てのラダークの聖地を概観して、聖地の特色の比較・考察をおこなう。

ブータン・カリン村のダンリン・セカ

ブータン東部のタシガン県カリン村の上部に、「ダンリン・ツォ」と呼ばれる聖なる湖がある（写真33）。標高約3500 m、周りを深山に囲まれて、入る川も出る川もない小さな湖だ。ふもとの村人

が祈りの旗ルンタをささげ、死後の住みかとされるケルンを無数に建てる。伝説では、この湖は女神アマ・ジョモとともにチベットから来た神ダンリンによって造られたという。アマ・ジョモは、チベットからアルナーチャル・プラデーシュ州を経由してブータン東部のこの辺りまで山岳民族ブロッパを導いたと伝えられる女神だ。ナムシュ村のアマ・ジョムと、方言による発音の違いはあるが同じ神である。

この湖に祈る儀式（セカ）が年に1度開かれる。ブータン暦の4月20日（西暦2012年は6月9日）に行われたのだが、雨期後の2011年11月には水をたたえていた湖が、乾期が終わった直後のダンリン・セカの日にはすっかり干上がっていて驚いた。ちょうど周辺の棚田で田植えが行われる時期である。多くの村人と僧が山の急斜面を登り、枯れた湖畔で雨乞いをして、豊作や無病息災を願っていた。翌日からは、人間も家畜も湖に近づいてはならない。近づけば豪雨や鉄砲水に見舞われ、作物が台無しになるという。村の水源近くに位置するため、その掟は水源林の保全にも役立っている。

収穫の終わる半年後には、冬の間南へ移動するというアマ・ジョモとダンリンを見送る儀式が、カリン村で行われる。その頃には、再びダンリン・ツォへ近づいてもよいという。作物のリズムと密接に結びついた祭礼である。

ラダーク・ドムカル村のゴンパ・ランジョン

インド北部のラダーク・ドムカル村には「ゴンパ・ランジョン」と呼ばれる聖地がある。チベット語で「天然の寺院」を意味するその名は、周囲の岩峰が仏塔や仏像に見えることからついたという。標高4800メートルの聖地の中心にあるのが写真34の球状花崗岩と呼ばれる岩石だ。岩のなかに埋めこまれたソフトボール大の塊は、化石ではなく、マグマのなかで岩片などを核にして球状に成長した石である。

周辺の村人は年に1度、チベット暦の5月15日（西暦2009年は6月26日）にこの岩を参拝する。未明に村の最上部を出発した人々は、山道を3～4時間登って石の柵に囲まれたご神体の岩に到達すると、彼らにとって貴重なバターで岩を清める。全身を投げだす五体投地礼を行い、岩を中心に回る。このあたりの花崗岩の歴史を考えると、この岩は6000万年以上前にできた可能性がある。岩の下には多くの精霊がいると考えられ、祈れば人や家畜を守ってくれるという。ゴンパ・ランジョンを訪れた村人たちの姿は、地球の歴史そのものに祈りをささげているようだ。

聖地の特色の比較

ナムシュ村とカリン村はわずか70 km程度で隣り合う地域であり、降水量の多い「森のチベット」として気候条件は似かよっている。そのため、聖地としての特色にも共通点が見られる。どちらも水や降雨、気候に関係する聖地であり、鉄砲水などの自然災害を祟りとして畏れる点が共通している。

ただし、標高はナムシュ村が2300 m程度、ダンリン・ツォが3500 m程度と多少開きがある。ラーソイシーは仏教との関わりがほとんどない自然信仰（ボン教）の祭礼であるのに対して、ダンリン・セカは仏教の僧によってとり行われ、自然信仰でありながらも仏教と結びついている点に違いが見られる。

一方、乾燥地域ラダークのゴンパ・ランジョンとラーソイシーの相違は顕著だ。ゴンパ・ランジョンの周囲に緑や生物はほとんど存在せず、命を拒絶する世界といっていい。一方のラーソイシーでは、多様な命をはぐくむ緑の山が祈りの対象だ。

アルナーチャル・プラデーシュ州西部やブータン東部の「森のチベット」といえる地域の聖地の特色は、’生命の源’を実感できる点にあるのではないだろうか。人々は山や自然によって生かされることを実感して、山から与えられた作物や魚などの恵みを持ちよって創造主への感謝を現わしている。

同じモンスーン地帯の雲南省北部のカワカブ（梅里雪山）という聖山でも、巡礼者は自然に生かされていることへの感謝や喜びを感じているようだった。それに対して、ラダークや西チベットのカイラス山などの乾燥地域の巡礼は、精神的・信仰的なものに昇華されているように感じられる。

生命の源は森と水であり、さらにたどれば、それらを生みだす山や土地そのものに行きつく。ナムシュ村のラーソイシーには、14の山の神とと

もに100以上の神（精霊）が関係する。まさに八百万の神の世界である。山や森に棲むこのような多くの神（精霊）の存在が、チベット仏教の力を相対的に抑えて、神仏をより強く習合させているように見える。

自然神への信仰の強さは、降水量や気温・湿度に比例するようだ。アルナーチャル・プラデーシュ州では、その強さが雲南省北部のカワカブなどよりもさらに大きくなっている印象を受けた。崇高なチベット仏教と、生命の根源を考えさせる自然信仰との対等な共存関係。それが森のチベットのもう１つの魅力である。

謝辞

本調査は、総合地球環境学研究所のプロジェクト「人の生老病死と高所環境――『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」（リーダー奥宮清人博士）の支援を受けておこなった。現地では、ナムシュ村のリンチン・ツェリン氏とディラン・ゾンのリンチン・ツェリン氏を始めとして、アルナーチャル・プラデーシュ州西部に居住する多くの方々にお世話になった。ここに記して感謝いたします。

参考文献

安藤和雄ほか：「東ヒマラヤのあこがれ地，アルナーチャル・プラデーシュ――その魅力と現代文明への問いかけ」，『生老病死のエコロジー　～チベット・ヒマラヤに生きる～』昭和堂，pp61-109，2011

水野一晴：「インド，アルナチャル・プラデシュ州のモンパ民族地域における住民にとっての「山」のもつ意味」ヒマラヤ学誌13, pp142-153, 2012

水野一晴：『神秘の大地，アルナチャル―アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会』昭和堂，2012

小林尚礼：『梅里雪山　十七人の友を探して』山と渓谷社，2006

Summary

The Present Circumstances and the Features of Sacred Places for Nature Worship in the Western Part of Arunachal Pradesh in India, “Forest in Tibet”.

Kobayashi Naoyuki

Kobayashi Photo Research Office

This paper presented 7 sacred places for nature worship in the western part of Arunachal Pradesh in India, which can be called ”forest in Tibet”. This paper focused the ceremony called “Lha-soishi” in Namshu village, one of the 7 sacred places. Program of “Lha-soishi” in the whole 3 days and villager’s thought was described. Most of the villagers noticed change in clothes and food on “Lha-soishi” , but represented confidently that the ceremony had not changed mentally. The author also compared the features of “Lha-soishi” with those of 2 ceremonies, “Dangling soelkha” in the eastern part of Bhutan and “Gompa rangjong” in the northern part of India. It was difficult to recognize the source of life around “Gompa rangjong” where it was very cold and dry because of high altitude and low humidity. People believe in Tibetan Buddhism strongly there. On the other hand, people in Arunachal Pradesh and Bhutan can realize why living things can live, because they can recognize the rich nature as the source of their life in the sacred places in “forest in Tibet” ! As there are many nature spirits, they might weaken piety of Buddhism relatively there. Spirits of nature can coexist with Buddha equally in “forest in Tibet”.